

# 渋沢敬三と魚名研究

——その特徴と学史的意義——

Shibusawa Keizo and Fish Name Research, its Characteristics and Academic Significance

安室 知

YASUMURO Satoru

## 要 旨

研究者としての渋沢敬三は正当に評価されていない。それは渋沢の魚名研究に対する評価に端的に表れる。渋沢の場合、優れた研究者や技術伝承者を資金的にバックアップしたり、学問のハーモニアス・デヴェロップメントを推進するなど、研究のオルガナイザーとしての名声に比べると、彼自身がおこなった研究に関する学会の論評はあまりに貧弱といわざるをえない。渋沢はそれまで顧みられることのなかった民具や漁業史料といった常民の生活資料の学術的価値に着目するなど、すぐれた先見性はあるものの、研究者としての評価は第一次資料の発掘者・提供者に留まるもので、彼自身の研究はあくまで柳田民俗学（主流）を補完するもの（または傍流）という位置づけしかなされていない。それは、渋沢にとってもっとも精力を傾けたといってよい魚名研究が、きちんと民俗学・歴史学分野で評価されていないことに象徴される。

昭和戦前期、1930年代から40年代にかけておこなわれた渋沢の魚名研究は、生物分類の基礎たる同定（identification）に出発するもので、成長段階名への注目など新たな発想に富むものであった。また、同定への強いこだわりは同時期にやはり始動する民具研究にも当てはまることであった。そうした研究に対する渋沢の基本姿勢は、民俗学の主流たる柳田国男の語彙主義への暗黙の批判となっていた。さらには、1930年代、近代学問への黎明期にあった民俗学にとって、研究対象だけでなく、周囲論のような方法論についても再考を強く迫るものとなっていた。事実、渋沢にとって魚名研究の集大成といってよい『日本魚名集覧』が刊行されると、柳田は『蝸牛考』を改訂しそれまで民俗学において推し進めてきた周囲論の一般理論化を諦めている。このことは、渋沢の魚名研究が単に一次資料を発掘し記録するだけのものではなく、また柳田民俗学を補完するだけの存在ではなかったことを如実に物語っている。

【キーワード】 渋沢敬三、アチック・ミュージアム、魚名、柳田国男、周囲論

## 1. 民俗学における渋沢敬三の評価

### 1) 一般的理解

- ・近代学問としての確立期（昭和戦前期）において、柳田国男が主導した語彙中心の民俗学（モノ（物質文化））の視点を導入。
- ・すぐれた民俗学者（例、宮本常一）のパトロン。
- ・すぐれた技術伝承者への援助。
- ・一次資料の発掘と記録保存の推進者。
- ・研究におけるチームワークの重視。
- ・研究におけるハーモニアス・デベロップメントの推進。
- ・学際的研究（例、九学会連合）のオルガナイザー。

### 2) 研究者としての評価

- ・民具や漁業史料の学術的価値に注目するなどすぐれた先見性はあるものの、研究者としての評価は第一次資料の発掘者に限定される。
- ・渋沢の研究はあくまで柳田民俗学（主流）を補完するもの（または傍流）という位置づけしかされない。
- ・渋沢による魚名研究の成果は辞書的な利用がなされるだけで、その研究内容がきちんと民俗学・歴史学分野では継承されていない。

## 2. 渋沢敬三およびアチックによる魚名研究の軌跡——年譜——

### 1) アチック魚名研究の年譜（1935-45年）

\*括弧内は出典を示す

年月（西暦）	事項
1936. 1	渋沢、魚名の研究を始める（渋沢個人の仕事として）（渋沢雅 1966）
1937. 1	「魚名集覧」がアチックの仕事としておこなわれるようになる（アチックマンスリー 20号）
1937. 1	アチックの新年打合会にて、魚名の採集が7,000に達したことが報告される（アチックマンスリー 20号）
1937. 2	「アチックマンスリー」紙上において『魚名温故録』の4月発刊が予告される（ただしその後、刊行は確認されず）（アチックマンスリー 21号）
1937. 10	大里、魚名集成に関連して「古事類苑」の内容整理をおこなう（アチックマンスリー 29号）
1938. ○	「魚名編輯室」開室（宮本 1973）
1938. ○	内田・木島、魚名のカード作成と整理をはじめる
1938. ○	チームワークとして魚名研究をおこなうようになる（宮本 1973）
1938. 5	渋沢、「魚名集覧」原稿についていったん浄書をおこなう（アチックマンスリー 35号）
1938. 5	渋沢、「魚名方言に関する若干の考察」執筆に着手する（アチックマンスリー 35号）
1938. 6	岩倉・村上・内田、東書文庫（東京王子）にて小学教科書を閲覧し魚名の収集をおこなう、同作業のため岩倉・村上は当分のあいだ東書文庫に通う（アチックマンスリー 35号）
1938. 7	内田・木島、魚名編輯室にてメダカ方言カード8,000枚の整理完了（アチックマンスリー 36号）
1938. 7	渋沢、「魚名集覧」巻頭論文の完成が近いことが報告される（アチックマンスリー 36号）
1938. 8	魚名編輯室は総動員（桜田、小野も参加）で、2日間にわたり東書文庫において教科書約700冊を閲覧し、魚名カードの採録をおこなう（アチックマンスリー 37号）
1938. 8	内田・木島、東書文庫採録の魚名カードを整理する（アチックマンスリー 37号）
1938. 8	岩倉、『目高考』より採録のカードを整理し、原稿の浄書に着手する（アチックマンスリー 37号）

年月（西暦）	事項
1938. 9	メダカ編輯室の仕事が順調に進んでいることが報告される（アチックマンスリー 38 号）
1938. 9	鈴木、「水産名彙」の調査を終える（アチックマンスリー 39 号）
1939. 2	新資料として「エチオピア」の液浸標本がアチックに入ったことが報告される（アチックマンスリー 41 号）
1939. 4	魚名集覧編輯室より、渋沢、「魚名集覧」の巻頭論文「魚名に関する二三の考察」脱稿が近いことが報告される（アチックマンスリー 43 号）
1939. 4	魚名集覧編輯室より、内田の監督のもと「魚名索引」の編纂に着手したことが報告される（アチックマンスリー 43 号）
1939. 4	魚名集覧編輯室より、カードに採録された魚名は 13,000 にのぼることが報告される（アチックマンスリー 43 号）
1939. 4	渋沢、「魚名方言に関する若干の考察」を脱稿し、「魚名集覧」から独立させる（宮本 1973）
1940. 5	渋沢、「式内魚名」を発表する（『季刊アチック』 1 号）
1940. 5	時局の影響で出版が滞るなか、近時『魚名集覧』が印刷に回る予定であることが報告される（季刊アチック 1 号）
1941. 5	渋沢、倉場富三郎編「日本西部及び南部魚類図譜」（グラバー図譜）の調査に長崎へ行く（森 online: text_99_001.html）
1941. 11	渋沢、社会経済史学会第 11 回大会にて講演し魚名研究の重要性について言及する（「所感：昭和十六年十一月二日社会経済史学会第十回大会にて」）（渋沢 1954）
1942. 3	渋沢、『日本魚名集覧第 1 部』を刊行する
1942. 8	渋沢、「式内水産物需給試考」（『渋沢水産史研究室報告』 2 輯）を発表する
1943. 2	渋沢、『日本魚名集覧第 3 部—魚名に関する若干の考察—』を刊行する
1943. 秋	渋沢、「『延喜式』内水産神饌に関する考察若干」の執筆を終える
1944. 10	渋沢、『日本魚名集覧第 2 部』を刊行する
1949. 10	渋沢、『延喜式』内水産神饌に関する考察若干』を発表する（『小野武夫博士還暦記念論文集（下）』）
1958. 12	渋沢、『日本魚名集覧（第 1・2 部組）』を再版する（角川書店）
1959. 10	渋沢、『日本魚名集覧第 3 部』を増補改訂し、『日本魚名の研究』（角川書店）として刊行する

## 2) 渋沢敬三の実業に関する年譜（1935-45 年：魚名研究期間）

\*参考：渋沢敬三記念事業実行委員会 「渋沢敬三三年譜」（ウェブサイト『渋沢敬三アーカイブ』）

渋沢敬三著作集編集委員会「年譜、付・渋沢家略系図」『渋沢敬三著作集第 5 巻』

西暦（年）	年齢	事項
1935	39	第一銀行（取締役：1926 より）、東京貯蓄銀行（会長：1931 より）、京城電気・澁澤倉庫（取締役）
1937	41	第一銀行（取締役）、東京貯蓄銀行（会長）、京城電気・澁澤倉庫（取締役）、帝国生命（取締役）
1941	45	第一銀行（副頭取）、全国貯蓄銀行協会（会長）
1942	46	日本銀行（副総裁）、大蔵省（顧問）
1944	48	日本銀行（総裁）
1945	49	大蔵大臣、貴族院議員、内務省顧問
1946	50	公職追放（1951 年追放解除）

## 3. 魚名研究の成果としての『日本魚名集覧』

年譜を見ると、渋沢敬三およびアチック・ミュージアムによる魚名研究は 1935 年ころから約 10 年をかけておこなわれたことになる。そしてその集大成として、1942 年から 44 年の 3 ヶ年にわたり『日本魚名集覧』全 3 部が刊行された。渋沢個人の関心事から出発するも、アチック同人のほぼすべてが関わりチームワークで成し遂げた、昭和戦前期におけるもっとも大きな仕事と言ってよからう。

ただし、その編纂過程をアチックの活動月報である「アチックマンスリー」をもとに見てゆくと、「日本魚名集覧」は1938～9年にはすでにいちおうの脱稿がなされていた。つまり、脱稿から刊行まで3年以上の月日を要したことになる。そのように刊行が遅れた理由としては、当初は第1部の巻頭に予定されていた渋沢の論考「魚名方言に関する若干の考察（魚名に関する二・三の考察）」を第3部として独立させるといった編集上の大きな変更があったこと、また一応の原稿脱稿をみた後も魚名カードが集積されていったためそれを増補したいという渋沢の意向が働いたこと、さらには戦時下の時局の影響（紙や印刷工の不足など）により印刷が思うようにすすめられなかったことがアチックマンスリーの記事から読み取れる。

こうして、1942年3月1日に「アチックミュージアム彙報」第52集として、『日本魚名集覧第1部』がまず刊行されることになる。これは日本産魚類に関する和名、古名、漢名、地方名（方言名）を集成した辞書である。本書には、延喜式や風土記といった古代から近世記までに編まれた古文献244点、水産調査報告書や魚類図鑑など95点およびアチック同人の調査データをもとに、魚名15,690件が抽出され収められている。さらに、そこには日本産魚類1230種の分布とその古名および方言（11,868件）が記載されている。渋沢は後に『魚名集覧』を「資料採集方法上の種々の困難と欠点があり従って全数量の貧困は致命的とさえいえる」[渋沢 1959]と振り返るが、水産史および魚名の研究史において本書を超えるものは存在しないのは間違いないといつてよい。

続く1943年2月10日には、「日本常民文化研究所彙報」第59集として、『日本魚名集覧第3部』が刊行される。第3部は「魚名に関する若干の考察」と副題がつけられているように、第1部の魚名辞書を編纂する過程でなされた考察がまとめられている。「自分としてはほんとうに楽しみながら魚名を集め、集まるにしたがいろいろな感想も湧いて来たので、学問的素養のない身として大それたこととは思いつつもまとめて見たのが『魚名に関する若干の考察』であったと自嘲するが、その内容は後述するように魚名研究に関する先駆的で、かつ成長段階名の提起など新しいアイデアを含む画期的なものであったと評価される。また、同時期に同じく動物名彙（蝸牛）を用いてなされた柳田国男の周囲論に対する鋭い批判となり、それは日本民俗学が近代学問として打ち立てられようとするときに大きく軌道修正を迫るものであったと評価される[安室 2016]。

また続く1944年10月10日には、3部作の最後となる『日本魚名集覧第2部』が「日本常民文化研究所彙報」第58集として生活社より刊行される。これは第1部（辞書編）の索引となるものであるが、学名、和名、漢名や外国語名といった多様な魚名から検索することができるようになっており、かつ巻末には「引用初等教科書」の一覧も付されている。第3部により第1部の辞書編の利用は格段に利便性を増しており第1部と合わせ辞書を構成する重要な要素となっている。

なお『日本魚名集覧』全3部が刊行される過程で、彙報のシリーズ名が「アチックミュージアム彙報」から「日本常民文化研究所彙報」と変わっているのは戦時体制下において研究所名をアチック・ミュージアムから日本常民文化研究所へと変更せざるをえなかったためである。また、彙報の通し番号が奥付の刊行年と逆転しているものがあるのは、おそらく第1部の索引として先に発行すべき第2部の編集作業が遅れたことにより第3部を先に発行しなくてはならなくなったためと考えられる。

そして、戦後になると、1959年10月10日には、『日本魚名集覧第3部』を増補・改訂するかたちで、書名も『日本魚名の研究』と変え角川書店より刊行する。これにより、『日本魚名集覧第3部』には存在した「はじがき」が削除され、それに変わって「あとがき」が付加されている。内容的には、章や節の組み替えなど構成に若干の変更が加えられており、また「同名異魚資料」ほか3件が資料編として増補されていることは大きな変更点である。太平洋戦争を挟んで約15年の時を



経た後の改訂であったため、資料の増加と研究の深化が反映されているといつてよい。

なお、『日本魚名集覧』のほかにも、渋谷個人の論考としては、古文献に記された魚名について「式内魚名」（1940年）、「式内水産物需給試考」（1942年）、「『延喜式』内水産神饌に関する考察若干」（1943年）などが著されている。

#### 4. 渋谷敬三による魚名研究の基本

##### 1) 魚名研究の目的

渋谷は、魚名を「日本漁業史を扱う上での手がかり」3つのうちの1つとする。その3つとは、魚名のほかに「漁人伝」と「漁具」である。

魚名研究がおこなわれていた昭和10年代のアチック・ミュージアムをみると、その内部組織として、第一部会（漁業史研究室、内浦史料研究室）と第二部会であるとか、また文献索引編纂室、民具研究室、筌研究会などというように、その時々を中心的テーマごとにセクションをもうけ、主たる担当者を決めて研究を推進していたことがわかる。そうしたセクションのひとつに魚名編纂室（魚名編集室、魚名集覧編纂室）があり、そこに複数の同人が配置されていた。こうしたことをみても、戦前期（おもに昭和10年代）においては魚名研究がアチック・ミュージアムの中心課題の一つであったことが理解される。

なお、日本漁業史を扱う上での手がかりの一つとして魚名とともに挙げられている「漁人伝」については、その成果として『日本漁民事績略』[渋谷 1954]が刊行されている。また、「漁具」については指標漁具としてウケ（筌）を設定し、全国的な規模で民具と方言（ウケ名称）の収集がはかられていたが、まとまった研究成果は未完のまま終わる。そう考えると、研究への取り組みや成果物の大きさといったことにおいて魚名は渋谷にとって漁業史研究の核に位置したといつてよからう。

##### 2) 魚名研究に対する取り組み姿勢

- ・ 渋谷個人の興味関心から出発する。
- ・ 渋谷主導のもとアチックの中心的研究課題として位置づけられる。
- ・ 魚名研究は、他の研究課題とも共通することであるが、「チームワーク」の重要性がたびたび強調される。実際、東書文庫にアチック総出で魚名カードの採取に出かけるなど、魚名編纂室がリードしつつ多くのアチック同人が研究の実務を担っていた。
- ・ 財界人として要職にあった渋谷は、「毎朝出勤前の午前六時半から八時半までの間の二時間をこの研究（魚名研究）にあて」ていた[渋谷 1959、宮本 1973]。
- ・ 魚名研究は実質的に、「昭和一二年一月元旦よりはじめて、それから二年間」に集中しておこなわれたものである[河岡 1967]。
- ・ 魚名研究は、「先生のもっとも油ののった、しかも時間的な余裕のあった昭和10年から17年までの間に仕上げられた」ものである[宮本 1973]。
- ・ 最後まで、自身を学者としては「全くの素人」、刊行した自著（『日本魚名集覧』）は「全くの小学生が画いた自由画」と卑下する[渋谷 1942]。
- ・ 当時の民俗学に欠けていた「生物学的」「実証的研究法」を導入しようとし、魚名研究でそれを実践した[渋谷 1933]。

## 5. 魚名研究の進め方

### 1) 魚名研究の具体的手法

#### ①研究を進める上での基礎的文献

- ・学名による分類目録である『日本産魚類目録』（ジョルダン・田中茂穂・スナイダー編）を魚名研究の土台とする。
- ・内田清之助編『日本動物図鑑（第3版）』（田中茂穂編「魚類」）を調査時の魚種同定に利用する。

#### ②魚名が記された文献資料の収集とその資料化

- ・魚類学者や水産学者の報告を中心に収集＝生物学的分類をもとにした文献を重視する。
- ・民俗学者・方言学者の報告は魚種の同定がなされていないため割愛する。
- ・初等学校の教科書に載る魚名に注目する。後にその一覧は『日本魚名の研究』巻末の資料編に掲載される。

#### ③「延喜式」など古文献の収集とその資料化

- ・古文献資料の整理のため「魚名 MEMO」が作られる。
- ・古文献に記された魚類については、厳密には生物学的に魚種を特定することはできないが、記述内容からある程度同定が可能なものについては「参考魚名」に位置づけ研究対象化した。

#### ④水産会や魚市場における関係資料の収集

魚種別の取り扱い統計などの内部資料を入手し、そこに記された魚名（市場における流通名）に注目する。

#### ⑤アチック同人の調査派遣

- ・宮本常一、辛川正部、岩倉市郎、桜田勝徳といったアチック同人を魚名研究のため各地に派遣する（調査地は調査者自身が選んでいる可能性もある）。
- ・渋沢は、調査者に調査内容や手法はある程度任せるものの、特定の魚種（例、オコゼ）については特にこだわるよう求めたり、魚類図鑑を携行させて魚種同定をおこなわせたりしている。

#### ⑥アンケート調査の利用

福岡県柳河地方、同県三潞地方（辛川が自発的に実施した可能性もある）において実施している。調査地選定の理由は不明。

#### ⑦「魚名カード」の作成

- ・「魚名集覧」編纂上の基礎作業として進められる。1939年4月の段階で約13,000件あることが報告されている。
- ・多くの方言名を持つメダカについては、特別に「メダカ編輯室」を設け、「メダカ方言カード」（6,000件）を他の魚名カードから独立させた。
- ・魚名編輯室には魚名カード整理のための専属要員（内田ハチなど）がいた。

#### ⑧「魚名 MEMO」の作成

- ・さまざまな古文献から魚名に関連した記事を抜き書きしたものである。
- ・現在、流通経済大学図書館（祭魚洞文庫）に所蔵される（点数不明）。
- ・魚名カードの一部（一形式）として、古文献の中で取り上げられる魚類について作成された可能性もある。
- ・「魚名 MEMO」のまとめ方は以下の特徴がある。

魚種ごとにカード化される（1魚種1カード）／カードには複数の文献からの抜き書きが記される

／参照した魚類図鑑の文献番号とページ数を付す（同定のため）／魚類番号（『日本魚名集覧第1部』と共通）を付す

⑨魚名整理票の作成 ＊詳しくは本書の資料紹介（215頁）を参照

- ・アチックおよび渋沢により「魚名整理票」という資料を括る言い方がなされたわけではない（本報告のため便宜的につけた名称）。
- ・方言名の分布地を示し、その傾向を明らかにすることを目的に作成されたもの。
- ・渋沢個人の作業として、考察編をなすに当たり作成されたと思われる。
- ・魚名カードとは異なり、渋沢が自ら作成している。
- ・整理票の台紙には日本列島が印刷されたもの（44点）と単なる白紙のもの（53点）とがある。
- ・日本列島が印刷された整理票には北海道のあるもの（1点）とないもの（43点）の2種がある。また、日本列島内に都道府県の境界線が記されたもの（42点）と旧国の境界が示されたもの（2点）の2種がある（旧国が示されるのは主に淡水魚の分布）。
- ・整理票のまとめ方には、以下の特徴がある。  
魚種別（いくつかの魚種が1枚の整理票の中に描かれる。同属のものがまとめられていることが多い）／地域別（「近畿地方」〈分布図なし〉、「浮羽地方」〈分布図あり、詳細な河川図〉／目的別（「釣魚」、「貝類」、「淡水魚」）

⑩魚類標本の作成

- ・島など一定の領域設定が可能なところから実物の魚類を集め標本化している。例、周防大島、奄美大島、喜界島
- ・渋沢は「喜界島等の方々から魚類の実物標本を多数恵送された」[渋沢 1942a] とはいうが、標本採集地はすべて信頼する調査者を派遣したところ（例えば、喜界島は岩倉市部）であり、標本採集は渋沢の指示により魚名調査の一環としておこなわれた可能性がある。
- ・標本としては液浸と乾燥がある。例、エチオピア（液浸）、ハコフグ（乾燥）
- ・とくに渋沢が注目する魚類については、上記の採集対象地かどうかにかかわらず、その魚を入手し標本としている。例、エチオピア、ハコフグ

2) アチック魚名研究を支えた人たち——チームワークの実際——

①『日本魚名集覧第1・2・3部』（昭和17-19）の序文に掲載される人物

- ・宮本常一：アチック研究員（1939.4より）、資料調査（淡路沼島・瀬戸内海西部・奄美大島など）、渋沢の相談相手
- ・辛川正部：『メダカ方言考』（著者名：辛川十歩）や未発表資料の提供、資料調査（長崎水産会、三重県志摩郡坂手村など）
- ・木島一郎：魚名編纂室にてカード整理、東書文庫にて魚名カード作成
- ・内田ハチ：魚名編纂室にてカード整理、東書文庫にて魚名カード作成
- ・小宮山（小野）若木：魚名編纂室にてカード整理、東書文庫にて魚名カード作成
- ・村上俊順：魚名編纂室にてカード整理、東書文庫にて魚名カード作成
- ・岩倉市郎：資料調査（喜界島など）、東書文庫にて魚名カード作成
- ・鈴木行三：（役割不明）
- ・五十澤二郎：（役割不明）
- ・高木一夫：（役割不明）
- ・開明堂：『日本魚名集覧第1部』の印刷・組み版

②日本常民文化研究所所蔵の「魚名関連資料綴り」に登場する人物

- ・宮本常一：資料提供（渋沢宛手紙）
- ・太刀川敬康：資料提供（渋沢宛手紙）
- ・祝宮静：問い合わせ回答（渋沢宛手紙）、資料提供
- ・馬淵東一：問い合わせ回答（渋沢宛手紙）、資料提供（ブタの分類名など）

③その他

- ・岩田準一：「延喜式」から江戸初期までの文献から魚名を抽出し整理
- ・桜田勝徳：資料調査（奄美大島：宮本常一と同行）、東書文庫にて魚名カード作成
- ・大里雄吉：アチックにて魚名整理
- ・河岡武春：『日本魚名集覧』刊行後の関係資料の整理、「『日本魚名集覧』解題」執筆、常民研究所蔵「魚名関連資料綴り」の制作
- ・田中茂穂：田中ほか編「魚類目録」[D.S. ジョルダンほか 1913] や田中編「魚類図鑑」[内田 1929] を渋沢が重用
- ・柳田国男：情報交換、オコゼに対する関心の共有（成城大学民俗学研究所柳田文庫の『日本魚名集覧第3部』に対する柳田の書き込みの多くはオコゼについてのもの）

## 6. 渋沢敬三による魚名研究の特徴

### 1) 魚名研究の基本——「同定 (identification)」への強いこだわり——

- ・生物分類の基礎（目-科-属-種）に基づき、研究の対象魚はいったん学名に変換される。
- ・「方言学者の手に成る大部分の研究資料は魚種の認定が困難なる場合が多く、殆ど全部割愛」する [渋沢 1942]。
- ・「引用書は大部分魚類学者水産学者の手になるもの」とする [渋沢 1942]。

### 2) 「同定 (identification)」に基づく魚名研究の実践——研究のプロセス——

- ・学名表記による「魚類目録」[D.S. ジョルダンほか 1913] を魚名研究の土台・出発点とする。
- ・派遣する調査者には「魚類図鑑」[内田 1929] を持たせて調査させる。
- ・派遣した調査者からの報告には、聞き取った魚名に「魚類図鑑」の図版番号を付させる（調査時に魚種の同定をおこなわせる）。
- ・魚市場など実際に魚を見ることのできる場での調査。
- ・魚市場・水産会で作られる統計資料に表れた魚名の収集。
- ・「魚類の実物標本」の収集。
- ・「参考魚名」の認定。

### 3) 研究プロセスとしての魚名整理票

方言名と学名とを結び、方言名の分布地を一覧化することを目的に作成される。整理票に記載される事項は以下の通り。\*本書 215 頁の解説・216 頁の図を参照のこと

- ・魚名：標準和名、学名、和名、漢名、方言（地方名）
- ・魚類の分類：目-科-属-種
- ・地方名の分布地：地名（日本地図上に分布を表記するのではなく、余白に一覧として記す）
- ・形態：目につく特徴（例：ヒゲの形や色など）



- ・魚体：大きさ (cm)、重さ (kg)
- ・漁法：地域の特徴のあるもの
- ・味：同属異種との比較
- ・図 (スケッチ)：体色・模様 (色鉛筆を利用して描く)、形態、鰭の形と鰭棘の数

図鑑から写したものではなく、実際に魚を見てスケッチしたと考えられる (整理票の魚のスケッチは色鉛筆で彩色されているが、当時の魚類図鑑は単色の細密画で色はよく分からないことが多い。また、図鑑に描かれる魚の図とは違って、例えば釣り上げられて浮き袋が口から飛び出しそうになっている様子など、魚市場や漁船の上で漁獲されたときの状況がスケッチされている)。

#### 4) 渋沢敬三の研究姿勢への評価

##### ①宮本常一の評価

渋沢による魚名研究は「生態学的」「科学的」で、かつ「精確度の高い資料」を用いてなされたもの [宮本 1973]。

##### ②河岡武春の評価

渋沢による魚名研究は、「動物学よりする生態学的な物の見方」[河岡 1967] が基本にあり、「魚類学の素養も無ければ成立しえない業績」[河岡 1979] である。また、そうした同定を重視する研究姿勢は、「民俗語彙」「民具」についても同様である [河岡 1979]。

##### ③二野瓶徳夫の評価

渋沢の『日本魚名集覧』編集に見られる資料収集への意欲と自然科学的厳密性を持った資料整理について、「柔らかに自由な発想とあくことを知らない探究心」がなくてはできないこと [二野瓶 1992]。

### 7. 渋沢敬三の魚名研究が民俗学に与えた影響とその意義

#### 1) 民俗学における昭和初年から 10 年代

##### ①動物名彙をめぐって先駆的な研究がシンクロしておこなわれる

- ・柳田国男の蝸牛 (『蝸牛考』) と渋沢敬三の魚 (『日本魚名集覧』)

##### ②民俗学は近代学問としての黎明期を迎える

- ・推進者は柳田国男。柳田による昭和 10 年『郷土生活の研究法』、昭和 9 年『民間伝承論』の刊行
- ・民俗学において初めての方法論書が編まれ、周囲論や重出立証法などの方法論の整備が進む。
- ・昭和 10 年「民間伝承の会」が結成され、研究者の組織化 (学会) がはかられる。

#### 2) 日本魚名集覧 (渋沢) と蝸牛考 (柳田) の関係年譜

- ・1927 年 4-7 月 「蝸牛考」 (『人類学雑誌』42 巻 4 ~ 7 月号)
- ・1930 年 7 月 『蝸牛考』 (刀江書院) \* 「蝸牛異稱分布図」を掲載
- ・1942 年 3 月 『日本魚名集覧第 1 部』
- ・1943 年 2 月 『日本魚名集覧第 3 部』 \* 「沿岸特殊魚名表」を掲載
- ・1943 年 2 月 『蝸牛考 改訂版』 (創元社)
- ・1944 年 10 月 『日本魚名集覧第 2 部』
- ・1958 年 12 月 『日本魚名集覧全 2 巻 (1 部・2 部)』再版 (角川書店)
- ・1959 年 10 月 『日本魚名の研究』 (角川書店) \* 『日本魚名集覧第 2 部』を増補・改訂したもの

- ・1980年 5月 『蝸牛考』（岩波文庫版）＊創元社刊の改訂版を底本とするも、付録として初版にしかない「蝸牛異称分布図」を掲載。さらに柴田武による図「『蝸牛考』による蝸牛方言の周圏分布」（柴田 1980）を掲載。

### 3) 日本魚名集覧（渋沢）と蝸牛考（柳田）の関係——分布図をめぐる——

- ・1930年『蝸牛考』（初版）において「蝸牛異称分布図」が提示され、初めて周圏論が図示される。
- ・1943年『日本魚名集覧第3巻』で「沿岸特殊魚名表」（図）が提示され、魚名分布において「遠方の一致」は6つある傾向性の一つにすぎないことが示される。さらにそれについて周圏論による解釈はなされない。
- ・1943年『蝸牛考』（改訂版）で、「蝸牛異称分布図」は削除される。つまり、柳田の図は渋沢の「沿岸特殊魚名表」と相照らす存在であるとともに、トレードオフの関係でもある。

### 4) 渋沢魚名研究の学史的意義——柳田国男との対比——

- ・民俗学の主流（柳田民俗学）への暗黙の批判となる。
- ・昭和10年代、近代学問としての民俗学の黎明期において、対象（民具）だけでなく、方法論（周圏論）についても再考を迫った。
- ・魚名研究に「同定」のプロセスを設定することで、柳田の語彙主義を強く批判し、『蝸牛考』の元をなす質問紙調査とともに、その後の調査結果の恣意的な解説について修正を迫った。
- ・周圏論の民俗学における一般理論化をとどまらせ、方言研究に限定させる重要な契機となった。
- ・単に一次資料を発掘し記録するだけでなく、また柳田民俗学を補完するだけの存在でもないことを示した。

---

## 引用参考文献

---

- アチックマンズリー編集室 1937～1939 『アチックマンズリー』 20～37号
- 河岡武春 1967 「澁澤先生と常民の学問」、『日本の民具』第4巻付録、慶友社
- 河岡武春 1979 「『日本魚名集覧』解題」、渋沢敬三伝記編纂刊行会編『渋沢敬三 上』
- 季刊アチック編集室 1940 『季刊アチック』 1号
- 柴田 武 1980 「解説」、柳田国男『蝸牛考』（岩波文庫）、岩波書店
- 渋沢敬三 1933 「アチックの成長」、『祭魚洞雑録』、郷土研究社（『澁澤敬三著作集 第1巻』、1992、平凡社、所収）
- 渋沢敬三 1940 「式内魚名」『季刊アチック』 1号
- 渋沢敬三 1942a 『日本魚名集覧第1部』（アチックミュージアム彙報52）、アチック・ミュージアム
- 渋沢敬三 1942b 「式内水産物需給試考」、『渋沢水産史研究室報告』 2輯
- 渋沢敬三 1943a 『日本魚名集覧第3部—魚名に関する若干の考察—』（日本常民文化研究所彙報59）、日本常民文化研究所
- 渋沢敬三 1943b 「『延喜式』内水産神饌に関する考察若干」、『小野武夫博士還暦記念論文集（下）』、日本評論社
- 渋沢敬三 1944 『日本魚名集覧第2部』（日本常民文化研究所彙報58）、生活社
- 渋沢敬三 1954 『祭魚洞雑考』、岡書院
- 渋沢敬三 1955 「本書上梓のいきさつ」、日本常民文化研究所編『日本漁民事績略』、岡書院
- 渋沢敬三 1958 『日本魚名集覧（第1・2部組）』（再版）、角川書店
- 渋沢敬三 1959 『日本魚名の研究』、角川書店
- 渋沢雅英 1966 『父 渋沢敬三』、実業之日本社
- 渋沢敬三著作集編集委員会 1992 「年譜、付・渋沢家略系図」、『渋沢敬三著作集第5巻』、平凡社
- 田中茂穂 1929 「魚類」、内田清之助編『日本動物図鑑（第三版）』、北隆社
- 田村善次郎 2011 「はじめに」、『宮本常一 農漁村探訪録Ⅺ—淡路沼島調査ノート』、周防大島文化交流センター

- 二野瓶徳夫 1992 「解説 日本漁業史研究の先覚者」、『渋沢敬三著作集第2巻』、平凡社
- 日本常民文化研究所 1955 『日本漁民事績略』、岡書院
- D.S. ジョルダン・田中茂穂・J.O. スナイダー 1913 『日本産魚類目録』、東京帝国大学
- 宮本常一 1973 「『魚名集覧』のことから」(原題「解説」)、『日本常民生活資料叢書 第3巻』、三一書房(『宮本常一著作集50巻』、2008、未來社、所収)
- 宮本常一 1973 「渋沢敬三のこと」(原題「解説」)、『日本常民生活資料叢書月報19』三一書房(『宮本常一著作集50巻』、2008、未來社、所収)
- 宮本常一 1978 「『日本魚名の研究』」、『日本民俗文化大系3』、講談社(『宮本常一著作集50巻』、2008、未來社、所収)
- 安室 知 2016 「蝸牛と魚一周圏論の図化をめぐる、柳田国男と渋沢敬三」、『日本民俗学』288号
- 柳田国男 1927 「蝸牛考」、『人類学雑誌』昭和2年4・5・6・7月号
- 柳田国男 1930 『蝸牛考』、刀江書院
- 柳田国男 1943 『蝸牛考』、創元社
- 柳田国男 1980 『蝸牛考』(岩波文庫)、岩波書店
- 横浜市歴史博物館 2002 『屋根裏の博物館—実業家渋沢敬三が育てた民の学問—』
- 流通経済大学図書館 1973 『祭魚洞文庫目録：流通経済大学所蔵』、流通経済大学

〔インターネット文献〕

- 渋沢敬三記念事業実行委員会 「渋沢敬三年譜」(『渋沢敬三アーカイブ』) <https://shibusawakeizo.jp/history/> (2018.6.3)
- 森 望 「倉場氏魚譜(グラバー図譜)長崎へ帰る—渋沢敬三の長崎魚への想い—」 [https://shibusawakeizo.jp/writing/text\\_99\\_001.html](https://shibusawakeizo.jp/writing/text_99_001.html) (2018.6.3)